

高岡城遺跡調査概報

—平成7年度、送水管地区、三の丸茶屋地区の調査—

1997年3月

高岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は、送水管敷設工事及び三の丸茶屋建設に伴う高岡城遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 当調査は、高岡市都市整備部公園課の委託を受けて、高岡市教育委員会文化財課が主体となり実施した。
3. 発掘調査は、高岡市教育委員会文化財課の指導の下、山武考古学研究所が実施した。
4. 調査地区は、高岡市古城である。
5. 現地調査期間は、平成7年10月11日から同年11月14日までである。
6. 報告書作成は、平成8年度事業として実施した。
7. 調査関係者は次のとおりである。
高岡市教育委員会文化財課
課長：田村晴彦
主幹：石浦正雄（埋蔵文化財係長）
係員：山口辰一
係員：根津明義
係員：荒井隆
山武考古学研究所
所長：平岡和夫
事業部長：桐谷優
係長：武部喜光
8. 本書の執筆は、「I 調査に至る経緯」を石浦が、その他を桐谷が担当した。

凡　　例

1. 方位は座標北を示し、平面図・土層断面図に記した数値は標高を示している。
2. 図面の縮尺は次のとおりである。
遺構：整地面の平面図 - 1/10、土層断面図 - 1/40
遺物：土器 - 1/2
3. 遺物の写真図版は、縮尺1/2である。
4. 遺構記号は次のとおりである。
TP：試掘坑、SK：土坑
5. 図面に使用したスクリーントーンは次のとおりである。



目 次

例言

凡例

目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡概観	3
III 調査の方法と経過	6
IV 送水管地区	8
V 三の丸茶屋地区	13
VI 結語	16

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 (1/5万)	1
第2図 高岡城と周辺の遺跡 (1/2万5千)	2
第3図 忙連図、大日本帝国陸地測量部「高岡」(1/2万5千)	2
第4図 高岡城古図	4
第5図 前田家略系図	5
第6図 高岡城全体図と調査地区位置図 (1/5,000)	7
第7図 送水管地区全体図と試掘坑及び断面位置図	9
第8図 送水管地区出土遺物実測図 (1/2)	11
第9図 三の丸茶屋地区全体図	14
第10図 三の丸茶屋地区基本層序模式図	15
第11図 三の丸茶屋地区整地面の平面図とエレベーション図 (1/10)	15
第12図 ポーリング位置と柱状図	17

図 面 目 次

図面1 遺構実測図 送水管地区 試掘坑TP-1・TP-2断面図	
図面2 遺構実測図 送水管地区 試掘坑TP-3・TP-4断面図	
図面3 遺構実測図 送水管地区 武掘坑TP-5・TP-6断面図	
図面4 遺構実測図 送水管地区 試掘坑TP-7・TP-8・TP-9断面図	
図面5 遺構実測図 三の丸茶屋地区 土層断面図、東壁〔1〕	
図面6 遺構実測図 三の丸茶屋地区 土層断面図、東壁〔2〕	
図面7 遺構実測図 三の丸茶屋地区 土層断面図、西壁	
図面8 遺構実測図 三の丸茶屋地区 土層断面図、中央壁	

図 版 目 次

- 図版1 遺構 送水管地区 1. 明キ丸東側整地面全景（北）
2. 明キ丸東側遺物出土状況（東）
3. 振手口北側整地面全景（東）
4. 鎌治丸から大手口整地面全景（北）
5. 大手口から鎌治丸整地面全景（南）
- 図版2 遺構 送水管地区 1. 試掘坑TP-1、土坑SK-1断面（東）
2. 試掘坑TP-5断面（西）
- 図版3 遺構 送水管地区 1. 試掘坑TP-2断面（北）
2. 試掘坑TP-2断面（東）
3. 試掘坑TP-3断面（東）
4. 試掘坑TP-4断面（東）
5. 試掘坑TP-6断面（東）
6. 試掘坑TP-8全景（西）
7. 試掘坑TP-8断面（西）
8. 試掘坑TP-9断面（東）
- 図版4 遺構 三の丸茶屋地区 1. 整地面全景（南）
2. 整地面近景（北）
- 図版5 遺構 三の丸茶屋地区 1. 調査前全景（南）
2. 東壁断面C～D（西）
3. 東壁断面D～E（西）
4. 西壁断面H～I（東）
5. 西壁断面I～J（東）
6. 中央壁断面K～L（北）
7. 整地面除去全景（北）
8. 整地面除去全景（南）
- 図版6 遺物 送水管地区 土師器、縄文土器

調査参加者名簿

発掘

麻生正三、奥伊太郎、鏡晃一、金岡武治、菊地正、国本明子、杉本広政、高田亮一、田畠京子、旅剛、
廣沢隆太郎、福田太一郎、水外一郎、山塙春朗、横川真奈美、若井正之

整理

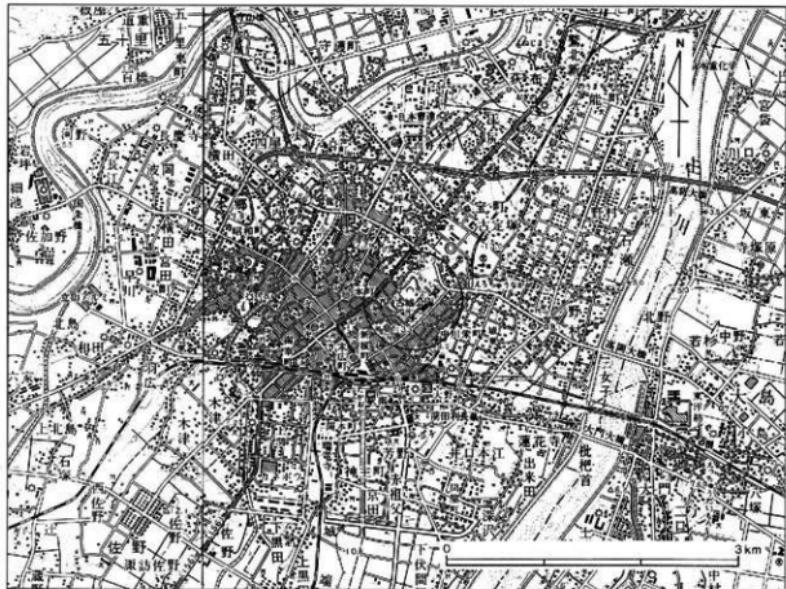
尾山久美子、新谷晴紀子、田辺幸代、寺井久子、土合良子、道谷美奈子、苗田朋江、椿薫、三國根理子

I 調査に至る経緯

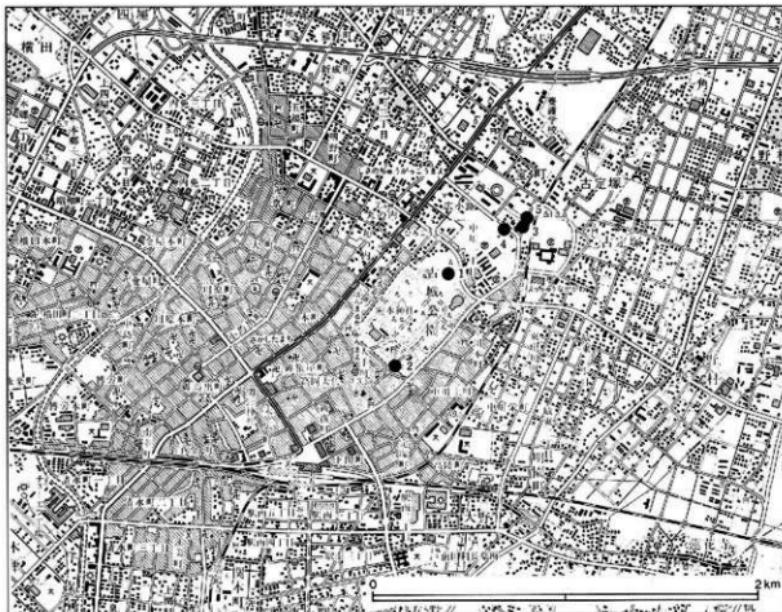
平成7年9月、高岡市都市整備部公園緑地課より、平成8年に古城公園において開催予定の「全国都市緑化とやまフェア」に向けて、古城公園利用者の利便施設の建築計画、大正7年に建築された「蓬莱莊」を解体し「三の丸茶屋」を建設する計画があり、また城跡の水濠を流水によって浄化するための送水管敷設の工事計画もあるとの報告を受けた。三の丸茶屋は、木造平屋建て、面積380.05m²で、レストランや休憩所等を設けるものであり、送水管敷設工事は、幅約50cmで、延長600mを掘削する工事計画であった。

当公園は、江戸時代の高岡城跡であり、富山県の指定史跡（昭和40年指定の高岡城跡）であることから、事業主体の公園緑地課と協議し、発掘調査を実施することになった。高岡城跡であり、後世の削平を受けている以外は、遺構が検出される可能性が高く、工事も急いでいるため、「三の丸茶屋地区」「送水管地区」と共に、試掘調査を省き、直ちに本調査をすることで協議が整った。また調査実施に当たっては、山武考古学研究所の協力を得ることになった。

発掘調査に先立って、県教育委員会から史跡の現状変更の許可と当公園の管理者である北陸財務局富山財務事務所の発掘承諾を得た。このような経緯で、平成7年10月11日より発掘調査を実施することになった。



第1図 遺跡位置図 (1/5万)



第2図 高岡城と周辺の遺跡 (1/2万5千)



第3図 迅速図、大日本帝国陸地測量部「高岡」(1/2万5千)

II 遺跡概観

1. 遺跡の位置と環境

高岡市は富山県の北西部に位置し、射水平野北東部の商工業都市として交通の要地である。古くは閩野ヶ原と呼ばれた高岡は、庄川沖積原のまん中に開まれた洪積層の台地であり、高岡城と城下町はこの大地上に営まれた。台地の西方約1kmの所には千保川が流れ、2~3kmの間を小矢部川が蛇行し、城から約1.5km北西へ進んだ所で両川が合流して伏木港へ向かう。また東方は約2kmの所を庄川が北流し、小矢部・千保両川と相対して閩野台地を挟んでいる。この三川は元来無関係のものではなく、姉妹の流れとされている。

本遺跡は前述した三川により形成された扇状地の扇中央部に立地し、高岡市役所より南西方向へ約0.7km、JR高岡駅より北東方向へ約1kmの地点に位置している。

高岡城内の遺跡としては、小竹藪遺跡（1）と大手口遺跡（2）が顕著である。小竹藪遺跡は高岡城の園地であると共に、縄文時代中期から後期後半に至る遺跡として知られている。1953年には高岡文化財保存会の藤平長門氏が中心となり発掘調査が実施され、遺構は明確にされなかったが縄文土器・石器等が多数出土し、「高岡古城公園小竹藪縄文遺跡」として報告されている。平成4年8月に小島俊彰氏を中心に実施した遺跡範囲確定を目的とした調査では、縄文時代の遺物以外に弥生土器や古墳時代の土器が出土し、本遺跡が複合的遺跡である可能性も指摘されている。大手口遺跡はその名が示す通り、大手町方面より土橋を渡り現在の博物館へ至る地区に所在し、小竹藪遺跡に類似する縄文時代中期の遺跡として知られている。しかしながら現在のことろ、遺跡包含層を含む遺跡範囲を確認するまでには至っていない。

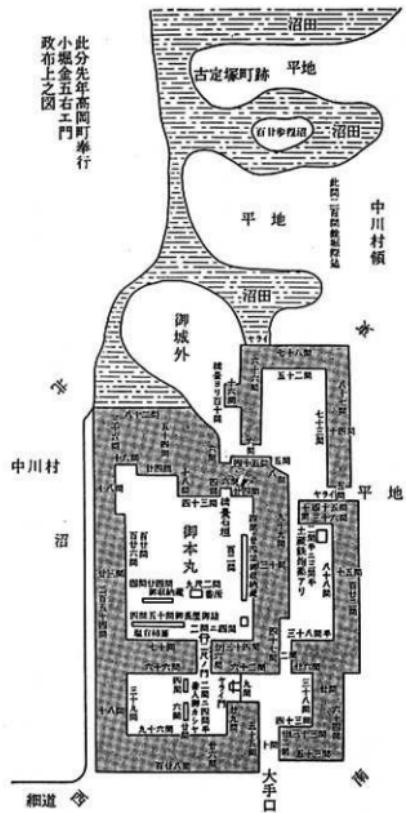
また、同台地上の北東方向には、旧石器時代の古定塚遺跡（3）、縄文時代晩期～古墳時代前期に亘る中川遺跡（4）、中世末～近世の入定塚遺跡（5）が周辺遺跡として確認されている。

2. 城跡の歴史

高岡は今もなお築城当時の繩張り、濠・堀等をほぼ完全に残している県内でも貴重な城郭遺構であり、現在は古城公園として広く市民に利用されている。

加賀藩祖前田利家の嫡男として生まれた二代目藩主利長が、高岡に城を築いたのは慶長14年（1609）の事であった。この年、前田利家が居城であった富山城が火災で消失したため、利長は一時魚津に移り、この地に築城したのである。『三州志』によれば、高山南坊（右近）が縄張りを行い、利家が秀吉より賜った伏見の秀次遺館の建築材を使って殿閣が建てられたと言う。利長は同年の秋よりこの城に移り、同19年5月20日に没した。その後、同年の大坂冬の陣には稻垣与右衛門が懲罰され、翌元和元年（1615）の大坂冬の陣に際しては岡崎備中守が留守役を勤めたが、同年の一月・城令によりわずか6年にして廃城となった。廃城により建物は撤去されたが、城郭や堀は原形のまま明治を迎えた。江戸期の城跡は、加賀藩の高岡町奉行の管理下に置かれ、米倉や火薬庫などが設けられていた。高岡市は利長の築城とともに、富山・守山・木船の三城下より家臣四百三十戸余、町民六百三十戸余が集められ、京都を模範とした町割りによって居住したことで成立した。市内には、当時の繁栄を思わせる蔵造りの町並みが今もよく保存されている。

城の構造等については、江戸時代の高岡町奉行を勤めた小堀金五右衛門が製作した古図（第4図）に詳しい。これによると、主郭となる本丸を中心的に他の四郭が配され、大手口は南西部に設けられている。また、水堀は本丸のみが一重で、他の方面は二重である。これは、本丸の西側が沼などの湿地帯で守られていたた



第4図 高岡城古図

(小堀金五右衛門作成、金沢市立図書館蔵)

めと言われている。

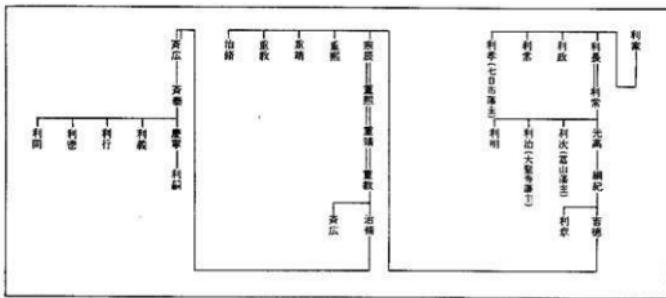
『三州志』は城の規模について「此の城跡 東南二百七十九間、南西一間、西北二百五十四間、北東は、東の方七十八間、北の方八十二。是四面城替の外側の数也。其の内本城は百三間に百二間、後郭は五十間に七十三間、本城右の脇郭は八十八間に三十八間、正門内は三十八間に四十三間、本丸の前郭は三十九間に九十六間也。」と記している。

廢城後の城跡が江戸期において、高岡町奉行の管理下におかれ、米倉や火薬倉などが設けられていたことは前述した通りであるが、古城跡をこのように実質的に残す処置は、他に魚津城にもみられ、そこに加賀藩の深い配慮が読み取れよう。また、街道の付け替えがあった際、城跡が、見えやすくなるとの心配から、定塚町が古定塚町から今の場所に移転させられたのも、実のところ濠・堀がそのまま残る城跡を隠す苦心の策であったと言う。また、南方に位置する前田利家廟と瑞龍寺は広大な敷地を擁しており、この方面的防衛の拠点としての性格を有していたと言われる。さらに、瑞龍寺については、仏殿の鉛瓦が有事の際の資材であったとまで言われている。

3. 城跡の概観

高岡城は、総坪数七万一千二百六十一坪（235,570 m²）で、その内水濠が二万二千四百坪（74,050 m²）を占めると言われており、十余万石の単なる居所ではなかった

ことが推察される。平面形状は、第4図の通り城全体が略長方形を呈し、東側長辺は南北の基準線に対し約35度東偏する。すなわち大手口は南西向きで、本丸前が二の丸、後方が小竹戸となっている。小竹戸は高台で、その北川の沼地を隔ててさらに小松原の台地を控える。その縦列を基準として、その東側に南から北へ、銀治丸・明キ丸・三の丸が一直線上に配置される。これにより本丸の南と東は堅固に防御される。北側は単なる台地と沼地であり、西側においては濠一條巡らすだけで、その外側には台地も城壁もなく、一見無防備に見える。しかし、この方面は段丘であり、崖の下は見通しが良く、さらに無数の沼地や田舎を使わなければ



第5圖 前田家諸系図

ならないほどの沿田ばかりで、進退の自由を失う難所と推察される。したがって、外敵に備えなければならぬのは東側と南側で、北側と西側は大きな人口の防備は必要なかったと考えられる。

各郭の位置は、定塚町常念寺横から博物館へ向かう所が大手口で、東北端の市民体育館から裁判所の方へ出る口が搦手口である。銀治丸は現在博物館が建っている場所で、大手門が拵形であったところから、この地を拵形と呼び慣わしている。本丸は利長の居館のあったところであるが、現在は射水神社の境内となり、他は弓道場、広場となっている。二の丸は本丸の前面の郭で、現在は市民会館・中央図書館・護国神社が建っている。本丸の東側を被っている郭は明キ丸と呼ばれ、現在は動物園となっている。その名称より、利長の治世には未だ建物は無かったと推測されている。明キ丸の奥の土橋を渡ると三の丸であり、現在は市民体育館が建てられている。城の搦手口を衛する重要な郭で、腰曲輪とも呼ばれる。小竹藪は前述したごとく、昔は中央部が小高い築山のようになっていたらしい。後宮の跡などと言う説があるが定かではない。

前述した各郭は、大小様々な水濠を巧みに巡らすことで独立し、橋によって連結している。濠はいずれも水濠であり、空濠は一つもなく、盛夏においても満々と水をたたえていることから、高岡七不思議の一つと言われてた。しかし、近年の地質調査により、庄川の伏流水を水源として利用していたことが明らかになっている。また、明キ丸から鍛冶丸にかけての外濠は、他に比して水位がかなり高く、内濠との間は僅か2間(3.6 m)幅の土橋であるが、これを透過して流れ落ちたという話は無いと言う。かつて、一度もかき干してみたことはなく定かではないが、これも庄川の伏流水の成せる業であろうか。

星は城團いに築く土壇であり、星のことを上居・土手・築地と呼んだ。「武家名目抄」は城というものは結局上居のことをさすのだという。星に屈折をつけるのは、城の威儀を増すとともに防御面上の効果も大きいことより、豈臣以後、徳川時代の城郭には盛んに用いられている。しかし、高岡城は屈折が少なく、統じて單純化されているのが特徴と言えよう。

建築物については現在一物も無く、図面・記録もほとんど無いので詳細は不明であるが、堺のことは築城工事中の利長の喪状にしばしば見られることより、入城前より建てられていたことは疑ひ難い。

III 調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査に用いた基準杭は公共座標を基準とし、平面実測は全てトータルステーションによった。

送水管地区

重機により幅1m(送水管埋設幅)で現代の舗装面を除去し、その後、丁寧に土居上端面の確認を行い、同面における遺構・遺物の検出に努めた。併せて調査区内に計9ヶ所の深掘穴(2×1m)を設け、土居断面の観察・記録を行った。

三の丸茶屋地区

現代の舗装面を重機で除去し、その後、調査区内に土層観察用のベルトを設け、人力で土居上端面まで掘り下げた。土居上端面での調査が終了した後に盛り土層を除去し、それ以前の遺構・遺物の確認を行った。

2. 調査の経過

調査は送水管地区・三の丸茶屋地区とも同時並行とし、平成7年10月11日より同年11月14日までの間実施した。調査の経過については下記の通りである。

送水管地区

10月11日 調査の打合せ後、調査区域の設定を実施。

12日 明キ丸の前より銀治丸へ向かい調査を開始。13日に公共座標の設定・水準測量を実施。後に、同地区に4ヶ所のTPを設置し、土居の断面観察を行う。

24日 銀治丸から大手口、銀治丸から二の丸方向の調査を開始。二方向へ各2ヶ所のTPを設置し、土居の断面観察を実施する。

11月8日 握手口の調査を開始する。同地区にTPを1ヶ所に配置し、土居の断面観察を行う。

14日 現地発掘調査の全てを終了する。

三の丸茶屋地区

10月14日 調査区域の設定・調査前現況撮影を実施した後に、重機により現代の整地層の除去を開始する。

16日 整地層の除去を継続。本日より作業員を導入し、人力による土居上端面までの掘り下げを開始する。

19日 公共座標(5×5m)の設定を行う。

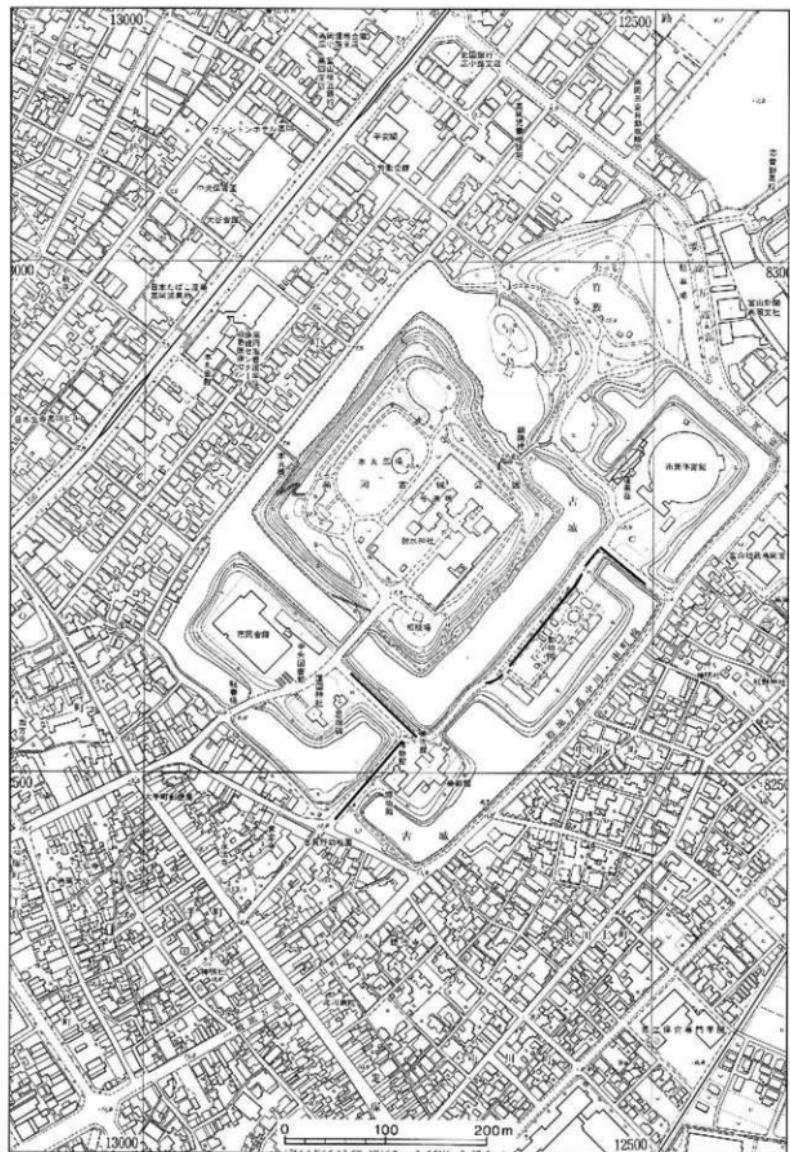
20日 水準測量を実施。

11月7日 土居上端面までの調査を開始する。

8日 盛土層の除去を開始する。

13日 盛土層の除去を終了し、断面実測を開始する。

14日 全景写真撮影を実施し、現地発掘調査の全てを終了する。



第6図 高岡城全体図と調査地区位置図(1/5,000)

IV 送水管地区

1. 概観

当地区的調査区は、揚手口の南側より入り明キ丸の東側を通過して銀治丸へ向かい、銀治丸から二の丸へ向かう北側と、銀治丸から大手口へ向かう西側部分である。いずれも土居の調査であり、遺存する土居整地面と土居断面（盛土層）の確認・記録に努めた。盛土層以下に堆積する基本的層位は、上より茶褐色土（0.1 ~ 0.2 m）、黒色土（0.15 ~ 0.23 m）、黄褐色粘質土（0.6 m前後）、灰白色粘質土の順で続き、地点によっては茶褐色土と黒褐色土が逆転して堆積する。

2. 遺構

土居整地面

遺存する整地面の模様は、暗褐色・黄褐色粘質土を基調とし、層中に不定型の中礫・大礫を不規則かつ多量に含む。表面は疊がやや顔を覗かせる状態で、かなりの硬度を有している。

各地点毎に、土居の盛土状況・工程を観察するべく任意に計9ヶ所の試掘坑を設置した。その結果、下記の通りの成果が得られた。

試掘坑TP-1（図面1、図版2-1）

明キ丸と三の丸の東辺を結ぶ線上で、揚手口より三の丸方向へ約25m地点に位置する。盛土は1層より19層までと考えられ、標高は上端で12.4m、下端で11.05mを測り、層厚は1.3~1.5mの範囲にある。堆積状況は人雜把に言って、1~12層が黒褐色土層、14~16層は淡黃灰白色シルト質で構成されている。

土坑SK-1（図面1、図版2-1）

TP-1内に於いて検出された詳細不明の穴である。穴は3層以下を切込み1・2層に被覆され、底面は盛土層下端まで達する。時刻については重複関係より、土居の構築途上に造られ、土居完成時には機能を停止したと推察される。規模は深さ0.95m、推定上面径1.85m・下面径1.5mを測り、平面形状は不明。埋土は3層に分層可能な人為堆積で、C層は表込め土と考えられる。

試掘坑TP-2（図面1、図版3-1・2）

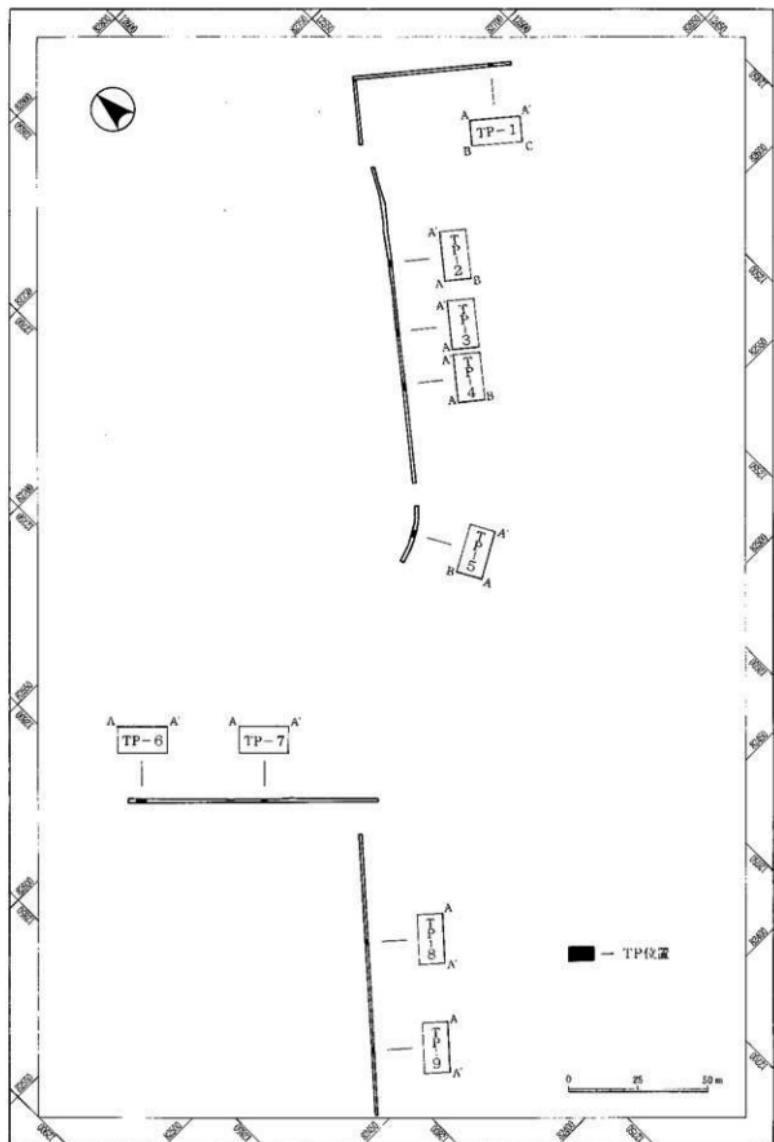
揚手口より土橋を渡り、明キ丸へ約50m程進んだ地点に位置する。盛土は1層より7層まであり、標高は上端で12.6m、下端で11.7mを測る。層厚は概ね0.9m前後を測るが、擾乱が著しい。堆積状況は3~6層を黄褐色粘質土と黒褐色土の互層堆積とし、7層は中礫・大礫（径20~250mm）に茶褐色・青灰色の細砂を交える。各層とも強固に締まる。

試掘坑TP-3（図面2、図版3-3）

明キ丸の中央部のほぼ前面に位置する。盛土は1層から15層まであり、標高は上端で12.7m、下端で11.65m、層厚は約1.05mを測る。堆積状況は整合的とは言いたいものの、上より順に黄褐色粘質土・黄橙色粘質土・灰白色砂質土・灰白色粘質土が乗り、その間に黒褐色土が介在している。各層とも強固に締まる。

試掘坑TP-4（図面2、図版3-4）

明キ丸の南より前面に位置する。盛土は1層より13層まであり、標高は上端で12.75m、下端で11.75mを測り、層厚は約1.1~1.3mの範囲にある。堆積状況は概ねTP-3に近似し、1~4層は橙褐色粘質土と暗褐色土の互層堆積を示し、5~7層は順に黒褐色土・暗褐色土・灰綠色砂質土が乗る。8~12層は粘



第7図 送水管地区全体図と試掘坑及び断面位置図

性の強い灰白色粘質土・橙褐色粘質土で構成されている。各層とも強固に締まる。

試掘坑TP-5（図面3、図版2-2）

明キ丸から銀治丸に向かう土橋の北端付近に位置する。盛土は、1層から19層までであり、標高は上端で13.0m、下端で11.6m、層厚は約1.4mを測る。盛土状況は上より順に黄褐色粘質土・灰褐色砂質土・茶褐色粘質土と続き、中位は灰白色砂質土、下位は橙褐色粘質土を主体に構成されている。また、1～6層は粘質土とシルト質土の互層堆積で、それ以下の層についてもほぼ同様の傾向を示す。各層とも強固に締まる。

試掘坑TP-6（図面3、図版3-5）

銀治丸より土橋を渡り二の丸へ入り、約20m進んだ地点に位置する。盛土は1層から24層までであり、標高は上端で14.85m、下端で12.8m、層厚は2m前後を測る。堆積状況は1～12層までは整合的に黒褐色土が介在し、絶じて粘性の強い土は使用されていない。14～17層は粘性の強い黄褐色粘質土、18～20層はシルト質土、22～24層は粘土質土で構成されている。各層とも強固に締まる。

試掘坑TP-7（図面4）

銀治丸と二の丸を結ぶ土橋の西端付近に位置する。盛土は1層から18層までであり、標高は上端で14.50m、下端で13.05m、層厚は1.45m前後を測る。盛土状況は大雜把に言って黄褐色粘質土・橙褐色粘質土・褐色土の互層堆積を成し、各層は強固に固まる。

試掘坑TP-8（図面4、図版3-6・7）

大手口より銀治丸へ向かって、約65m進んだ地点に位置する。盛土は1層から12層までであり、標高は上端で13.8m、下端で12.5m、層厚は約1.3mを測る。盛土状況は上より暗褐色土・黄褐色粘質土・青灰色シルト質土・茶褐色土・黄褐色粘質土の順で堆積し、以下は青灰色シルト質土を主体に構成されている。各層とも強固に締まる。遺物は14・15層より縄文土器が出土した。

試掘坑TP-9（図面4、図版3-8）

大手口より銀治丸へ向かって、約25m進んだ地点に位置する。盛土は1層から10層までであり、標高は上端で13.0m、下端で12.0m、層厚は約1m前後を測る。盛土状況は大雜把に言って、1～5層が黄褐色粘質土と黒褐色土、6～10層は青灰色シルト質土と暗褐色土の互層堆積を示す。各層とも強固に締まる。

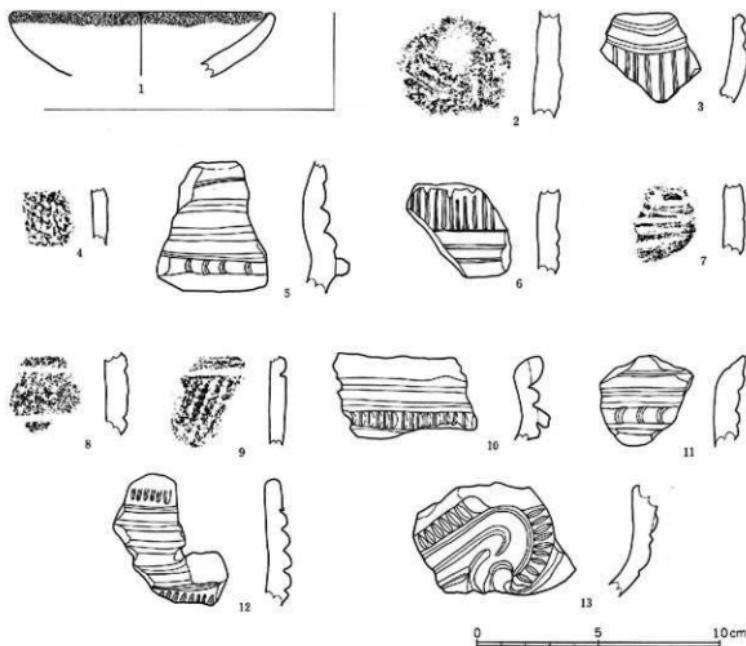
3. 遺物

土器（第8図、図版6）

1は非クロコ系の灯明皿で、TP-3より南へ約3.5m進んだ土層の整地面より出土した。縁部は緩やかに内済しながら立ち上がり、口縁部内外面に油煙痕が付着する。推定口径は10.5cmを測り、胎土は精良で微量の赤色鉱物粒子を含む。

縄文土器（第8図、図版6）

いずれもTP-8の14・15層より出土した、縄文時代中期前葉～中葉の上器である。2は胴部破片で、沈線を1条水平に引き、これより下に撚糸文を加えている。胎土中には長石粒子・小石粒子を含む。3はキヤリバー状の口縁部破片で、口唇直下に2条の隆起線を巡らし、以下を連華文状の垂下する沈線でうめている。胎土中には長石粒子・小石粒子を多量に含む。4は胴部破片で、全面に撚糸文が見られる。胎土中には長石粒子・小石粒子を多量に含む。5は頸部から立ち上がりながら外反する口縁部破片。半截竹管状の隆起線が4条巡らされ、最下段の隆起線には爪形文が加えられる。胎土中には長石粒子が多量に含まれる。6は口縁部破片と思われ、垂直方向に密に引いた連華文様の下に半截竹管による3条の隆起線が巡る。胎土中には長



第8図 送水管地区出土遺物実測図（1／2）

石粒子を多量に含む。7は割部破片、半裁竹管による隆起線を数状密に横走させている。胎土中には長石粒子を多量に含む。8は頸部付近の破片、半裁竹管による上下2条の隆起線間に撲糸文が見られる。胎土中には長石粒子を多量に含む。9は胴部破片、半裁竹管による隆起線が1条巡らされ、以下に密な斜行する撲糸文が加えられる。胎土中に長石粒子・小石粒子を多量に含む。10はキャリバー形の口縁部で、口縁部は肥厚し、波状口縁となる。4条の隆起線が巡らされ、下段のものには爪形文が加えられる。胎土中には長石粒子・小石粒子が多量に含まれる。11は垂直近くに立ち上がりながら外反する、口縁部破片である。5条の隆起線を横走させ、下段のものには荒い半裁竹管による爪形文を加えている。胎土中には長石粒子・小石粒子を多量に含む。12は頸部付近の小破片と思われる。半裁竹管による4条の隆起線が巡らされ、その隆起線に沿って櫛状工具による小刻み目文が付されている。胎土中には長石粒子を多量に含む。13はキャリバー状の口縁部。刻み目文を密に施した隆起線が溝を巻き、これに沈線による三文文を加えている。胎土中には長石粒子が多く見られる。

4. 小結

遺構

当地区的調査では、遺存する土居整地面の様相と断面観察（盛土工程）を主体に行った。土居整地面の様相は、縦じて疊（径 10～150 m）混じりの黄褐色粘質土で構成され、面を成し、顯著な硬化が認められる。この黄褐色粘質土は、遺跡及び周辺に広範に堆積する層（第10図、基本層序模式図第5層）と同質と考えられ、層厚は 0.6～2.0 m 前後を測る。この層には基本的に礫は含まれていない。したがって、土居整地面の主体を成す黄褐色粘質土層は、自然礫を作為的に混和したものと判断される。

土居（盛土）の堆積状況は、箇所によって違いが生ずるもの、縦じて各層に自然礫を含む事や互層堆積を基本としている事で一致している。

遺物

近世の遺物としては 1 の上飾器の皿 1 点のみであり、出土状況より城の機能段階の所産と考えられる。2～13 の網文土器は、盛土層の基底面直下に堆積する遺物包含層より出土したもので、2～11 は 14 層の茶褐色土上、12・13 は 15 層の黒褐色土に包蔵されていた。

V 三の丸茶屋地区

1. 概観

調査区は三の丸の南西隅にあたり、三の丸から本丸、または小竹敷へ通じる上橋入口の東側に位置する。東手には現在市民体育館が建てられており、スポーツの場として広く市民に利用されている。今回の調査では、三の丸の南西地区における整地面の様相と盛土の観察・記録を行った。

1層は近・現代の所産であり、2層の盛土層以下に堆積する層位は、3層が黒色土（0.4m）、4層は茶褐色土（0.1m）、5層は灰白色粘質土（0.6m）、6層はシルト質の灰白色粘質土の順で続く。

2. 遺構

整地面（第11図、図版4-1・2）

自然疊（径5~100mm）と灰白色粘質土を含む棕褐色粘質土を主体に構築されており、部分的にシルト質の灰白色粘質土が乗っている。現代の掘削・擾乱等により遺存状況は良くないものの、遺存面は平坦で、極めて強固に締まっている。

盛土層断面

東壁A~G（図面5・6、図版5-2・3）

遺存する盛土層は1層のみであり、標高は上端で13.15~13.18m、下端で12.90~13.10m、層厚は15~20cmを測る。上記の数値より上端は極めて平坦で、下端はやや起伏があることが確認されている。盛土層の黄褐色粘質土は、疊（径5~100mm）・灰白色粘質土・砂を混和し、極めて強固に構築されている。また、この上位に乗る各層は、出土品・堆積状況より近・現代の所産と判断される。

西壁H~K（図面7、図版5-4~6）

遺存する盛土層は1層のみであり、標高は上端で13.15~13.20m、下端で13.00~13.12m、層厚は8~15cmを測る。上端のレベルは東壁に一致し、盛土も東壁と同質である。

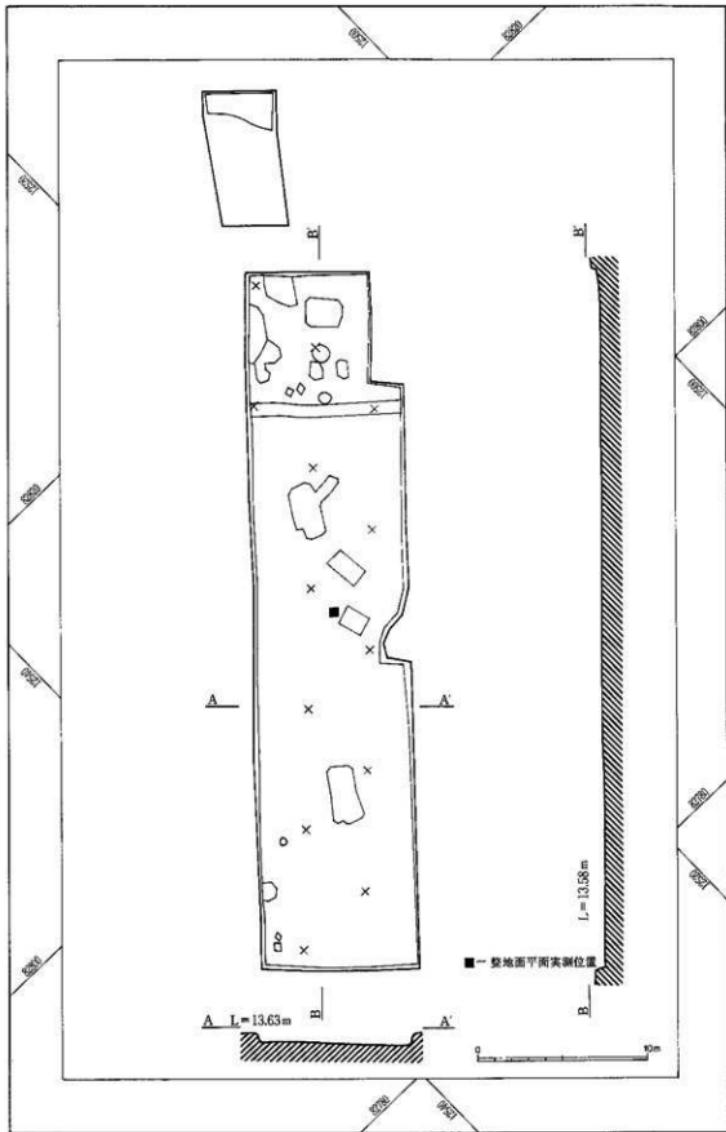
中央部L~Q（図面8、図版5-6）

調査区内において、最も整地面（盛土層）の遺存が良かろうと思われる部分の断面である。盛土層は1層で、標高は上端で13.15~13.20m、下端で12.85~12.90m、層厚は30cm前後を測る。上端のレベルは東壁と西壁に少分の違いもなく一致し、盛土も東壁と同質である。

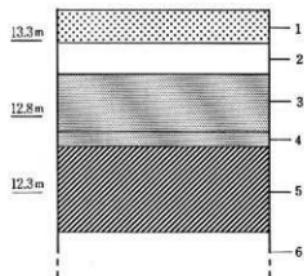
3. 小結

当地区が三の丸の南西に位置し、至近には現在に伝承される古井戸が鑿井されており、調査は終始、慎重に進められた。結果として、上部構造をもつ遺構の痕跡や整地面における落ち込みは皆無であり、それに伴うと思われる遺物等についても皆無であった。しかし、ある程度の広がりをもって整地面の様相や盛土の工程を知り得たことは大きな成果であった。

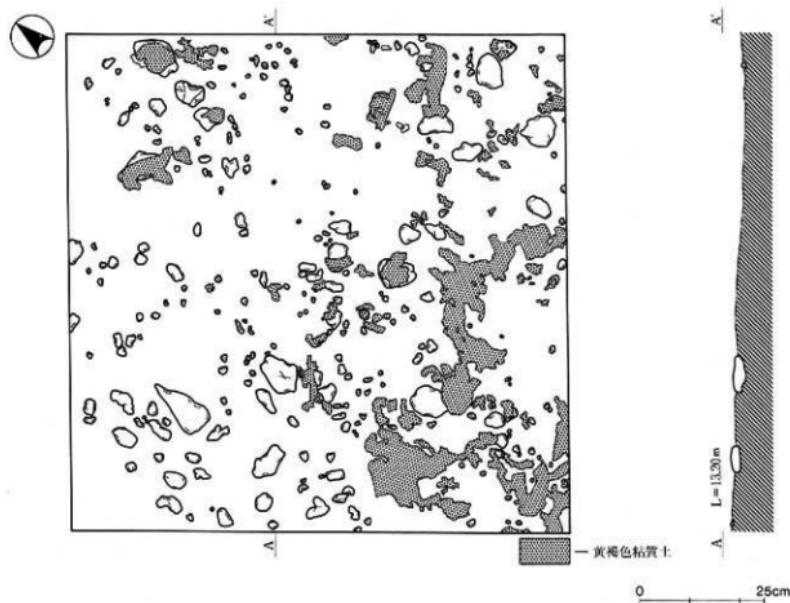
整地面は2の項で示した通り、極めて平坦かつ強固に構築されており、上端面にはいかにも踏みしめられたがごとくの様相が伺われる。盛土層は同質ではあるが、層厚は場所により異なっている。したがって、積み上げを開始した層（黒褐色土）はレベルが一定しておらず、然程整地が成されていない段階で積み上げが開始されたと思われる。



第9図 三の丸茶屋地区全体図



第10図 三の丸茶屋地区基本層序模式図



第11図 三の丸茶屋地区整地面の平面図とエレベーション図 (1/10)

VI 結 語

元和元年（1615）の「一国一城令」によって、全国の支城が破壊された時、必ずしも土塁や空堀の全てが削平されたわけではないが、虎口の枡形土塁などの防衛機能の中核は例外なく破却されたと考えられる。おそらく、それ以外の施設については、近代に大きな変形を受けない限り、機能段階の原形を止める例も多いと思われる。今回、調査が施された地区は、前述したそれ以外の施設に相当し、送水管地区・三の丸茶屋地区より良好な資料が得られている。

1. 送水管地区

遺構

今回の調査により、上居整地面の様相と盛土工程が明らかにされた。詳細については第IV章の2・4で記した通りであり、ここでは主だった事柄を列記する。列記するにあたり、第12図（以下右図と呼ぶ）を参照されたい。これは昭和38年に実施したボーリング調査（株 中部日本鉱業研究所）のデータで、調査位置は三の丸の西側である。この図中の観察記事によれば2・3層が該期の盛土層で、4層はTP-8の14・15層（繩文土器包含層）に相当すると考えられる。そうであれば、5層以下の堆積はプライマリーな堆積層と判断される。ただし、5層以下の堆積は地点毎に異なることが予想され、大同小異的に捉えておきたい。

①整地面の様相は各地点ともほぼ同様であり、表層は総じて礫（径10～150mm）混じりの黄褐色粘質土・暗褐色土が主体的で、顯著な硬化が認められる。

②整地面の標高は搦手口より三の丸、大手口より鍛冶丸、鍛冶丸より二の丸へと進むにつれ高さを増す。最大比高は順に、50m進み0.8m、200m進み1m、100m進み1m程度であり、明キ丸の前面通路は概ね平坦である。勾配は盛土の層厚によって調整されており、各地点の盛土層厚は0.9～2mの範疇にある。

③土居（盛土層）は、水濠を構築する時に出た土を利用して築くのであるが、当盛土は、右図に示した5～17層を主たる構材として用いている。各地点の盛土層序は、右図の層序と逆転の整合性が認められない。したがって積み上げは、ただ単に出た土を順に盛るのではなく分別して行われており、さらに層中に礫・黄褐色粘質土・灰白色粘質土等が作為的に混和されている。

④盛土の中層以下を構成する層は、上層に比してより多くの礫を含み、暗褐色・褐色系の腐食土、黄褐色・棕褐色の粘土系、灰白色・青灰色のシルト系の土が交互に積まれている。腐食土とシルト系は透水性は高いが比較的脆く、粘土系のみであれば乾燥して崩壊しやすい。また、シルト質土は他に混和することで固く結まる。これらの特質をバランスさせる事で、上層の強度を高めると同時に耐久性も得たと考えられる。

遺物

城に伴う遺物はIV章の4・5で述べた通り、灯火器として使用された土師器の皿が1点のみで、帰属年代は16世紀後半～17世紀初頭と考えられる。

遺構外の出土遺物としては、TP-8の14・15層より出土した繩文土器がある。TP-8の所在する大手口付近は、予てより繩文時代中期の土器が採集されており、周知の遺跡として認識されている。今回の調査では、この付近が繩文時代中期の遺跡であることを追認すると共に、盛土層直下に堆積する茶褐色・黒褐色土が該期遺物の包藏層であることが明らかになった。帰属年代については、遺物番号の2～11は中期前葉の新崎式、12・13は中期中葉の上山田・天神山式と考えられる。



GWL. GL. 4.50 m

深度 (cm)	層位 (cm)	地質				層位
		柱状図	地質	色調	経験記事	
40	40		表土	暗茶		1
1 50	1 10		粘質土	黄褐	細砂シルトを不規則に含む盛土部と思われる。	2
1 80	30	●	細砂	黄褐		3
2 20	40	●	腐植土	暗黒	粘性強し。	4
4 29	2 00	●	粘質土	黄褐	軟弱なるも粘性強し。シルト細砂分を不規則に夹む盛土部と思われる。	5
7 50	3 30	○ ○	玉石混り砂礫	淡黄	巨石多し max 80 ~ 100mm, 平均粒径 60mm, 5.00 M付近種少なく粗粒砂多し。崩壊著しい。礫量若干少なくなり細砂多くなる。礫平均粒径 50~60mm。	6
9 05	1 55	●	粘質土	黄褐	細砂シルトの薄層を夾む多層状をなす。粘性極めて強い。含水少ない。	7
10 10	1 05	●	細砂	茶褐	含水比較的多く薄層のシルト夾む。	8
10 90	80	●	粘土	黄褐	粘性極めて強く細砂をレンズ状に夾む。	9
13 90	3 00	●	細砂	黄褐	含水比較的少なく粒径均一なるも良く締まっている。若干のシルト分を含む。所々にシルト粘土を夾む。	10
14 80	30	●	シルト混り細砂	茶褐	極めて良く締まっている。	11
15 40	60	●	シルト	青灰		12
16 70	1 30	●	シルト混り砂	茶褐	含水比較的少なく良く締まっている。若干のシルトを含む。	13
18 00	1 30	●	シルト	暗青灰	比較的硬く上部境界付近は細砂を夾む。全体に暗褐色の有機物・貝殻を混入する。	14
20 90	2 90	●	細砂	青灰 1 暗茶褐	境界は割然とせず含水多くなるも良く締まっている。最も締まつた粒径均一なる細砂 15.60M付近より断続的に粗砂粒状の地質となり含水多く、粒径 30mm 位の内蔵介在す。	15
21 60	70	●	シルト	青灰	含水多く硬く団結し、有機物を夾む。	16
25 00		●	砂礫	暗茶	上部境界付近は粘土を夾む巨石多く、コアー状になり盛土部多く買入試験不能箇所あり。	17

第12図 ポーリング位置と柱状図

2. 三の丸茶屋地区

上居整地面の様相と盛土工程の詳細はV章の2・3で述べた通りであり、以下に概略を列記する。

①整地面の様相は、自然礫（径5～100mm）と灰白色粘質土を含む黄褐色粘質土を主体に構築され、いかにも踏みしめられたがごとくの状況が取扱われる。

②遺存する整地面の標高は13.15～13.20mの範囲にあり、面は極めて平坦かつ強面に構築されている。

③盛土は橙褐色粘質土を主体とし、礫（径5～100mm）・灰白色粘質土・シルト質土を含む単層で、調査区内においては同質・同様である。

④盛土の層厚は8～30cmの範囲にあり、上面の平坦は層厚の調整によって成されたものである。

⑤積み上げは送水管地区と同様で、黒褐色土（第10図、3層）の直上より開始されている。

以上が概略の事実関係であり、以下はそれを踏まえた若干の所見である。

当地区は三の丸の南西に位置し、調査時においては城の機能段階の構造物等の痕跡が予想されたことは冒頭にも記してきた。しかし、結果として、構造物等の痕跡やそれに伴う遺物は皆無であった。だが、今回の調査により、かなりの上部荷重をもつ建物が存在したとしても、それに十分耐え得る「良好な基礎構造」であろうことが確認された。では「良好な基礎」とはいかなるものであろうか。

現代の土質工学上で「良好な基礎」と呼ばれているのは、第一に基礎地盤が強面であり、地盤沈下が少ないこと、第二に基礎構造自体がしっかりと腐食しないことの2点を挙げている。これらの必須条件は、今も昔も基本的に同様と考えられる。そうであるならば、地盤沈下に影響の多い有機質土（糞土等）を圧縮性の低い細粒子（粘質土・シルト質土）や塵を混和した橙褐色粘質土に変更し、それを突き固めた当盛土は、「良好な基礎」に成り得たと考えられる。

以上が両地区における主な事実関係と若干の考察である。周知のごとく高岡城の建物については、図類も記録もほとんど無く、当時の偉容も美貌もうかがう術が無い。今後、何らかの機会に発掘調査が行われるならば大いに期待されるところである。

参考・引用文献

和田一郎 1955 「高岡市史上巻」高岡市史編纂委員会

國下多美樹 1992 「基礎構造からみた古代都城の礫石建物」『長岡京古文化論叢Ⅱ』 中山修一先生喜寿記念
事業団

大野文輔・山口辰一 1986 「美野下遺跡調査概報」－高岡古府治舍建設に伴う調査－ 高岡市教育委員会

後藤和民 1995 「木原城址Ⅱ」－平成6年度予備発掘調査概報－ 木原城址調査団

金子拓男・高岡徹・橋本澄夫 1976 「日本城郭大系7」 株式会社 剣史社

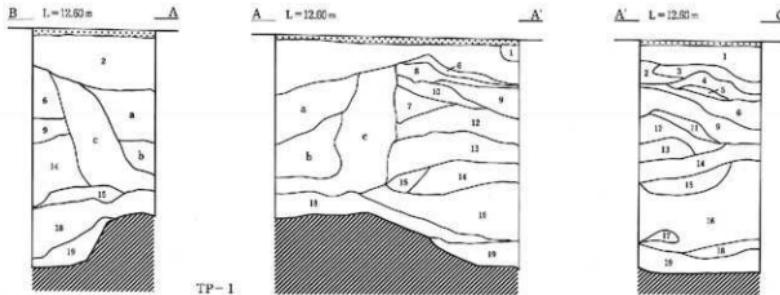
山口辰一 1996 「高岡市埋蔵文化財分布調査概報Ⅶ」－平成7年度、野村・横田地区他の遺跡分布調査－

高岡市教育委員会

太田久夫 1995 「金沢・北陸の城下町」『城下町古地図散歩Ⅰ』 平凡社

図面・図版

図面一 遺構実測図 送水管地区



TP-1

1. 黒褐色土、黄褐色粘土質土・灰白色粘土質土がブロック（径5～30m）で入る。
2. 黑褐色土、少量の黄褐色粘土質土がブロック（径2～10m）で入る。
3. 黑褐色土、微量の暗褐色粘土質土粒子を含む。
4. 黑褐色土、多くの灰白色粘土質土（径10～40m）・少量の黄褐色粘土質土（径2～20m）がブロックで入る。
5. 黑褐色土、色調やや明るい。
6. 黑褐色土、3層に似る。
7. 黄褐色粘土質土、シルト質。

15. 淡黃灰白色シルト、少量の黄褐色粘土質土がブロック（径5～20m）で入る。

16. 淡黃灰白色シルト、15層に似る。

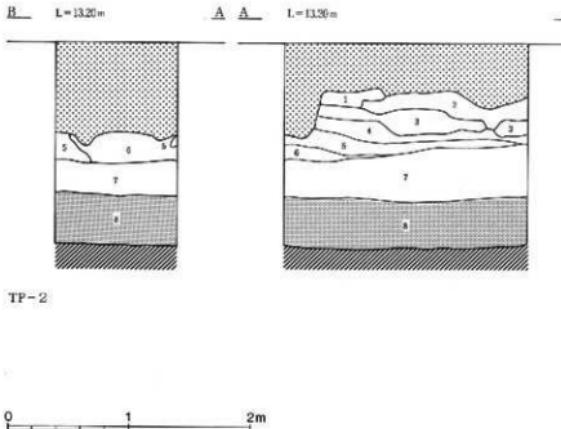
a. 細褐色土。中層（径10～50m）を観る。

b. 始褐色土、中・大層（径10～100m）及び灰白色シルト質土。黄褐色粘土質土がブロックで入る。

c. 黑褐色土、少量の中・大層（径10～80m）及び多くの灰白色シルト質土・黄褐色粘土質土がブロックで入る。

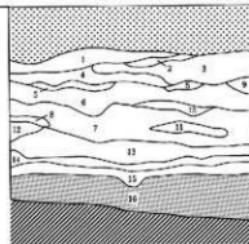
8. 黃褐色土、黄褐色粘土質土・淡黃灰白色シルト（径5～30m）で入る。
9. 黑褐色土、中層（径10～30m）を観る。
10. 黑褐色土、多くの淡黃灰白色シルト（径10～30m）・灰白色粘土質土（径5～20m）を含む。
11. 黑褐色土、9層に似る。
12. 黑褐色土、黄褐色粘土質土・淡黃灰白色シルトがブロックで入る。
13. 黄褐色粘土質土。
14. 淡黃灰白色シルト、黄褐色粘土質土がブロック（径5～30m）で入る。

TP-2



試掘坑TP-1・TP-2断面図

A L=13.30m

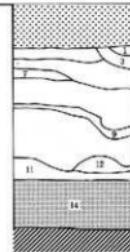


A' T P - 3

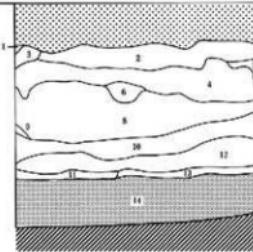
1. 黄褐色粘質土、不定型の中・大塊（径5～200mm）を多量に混入。しまり強い。
2. 黒褐色土、黄褐色粘質土ブロック（径2～30mm）、灰白色粘土ブロック（径5～40mm）を多量に含む。少量の中層（径5～20mm）を含む。しまり強い。
3. 黄褐色粘質土、少量の中層（径10～30mm）を含む。しまり強い。
4. 黄褐色粘質土、不定型の中・大塊（径5～100mm）を含む。しまり強い。
5. 黑褐色土、4層に似る。しまり強い。
6. 灰白色砂質土、不定型の中・大塊（径5～200mm）を多量に混入。しまり強い。
7. 灰白色砂質土、8層に似る。色調やや暗い。しまり強い。
8. 黑褐色土、4層に似る。しまり強い。
9. 灰白色砂質土、不定型の中・大塊（径5～100mm）を多量に含む。しまり強い。
10. 黑褐色土、4層に似る。しまり強い。
11. 黑褐色土、4層に似る。しまり強い。
12. 黄褐色粘質土。
13. 灰白色粘質土、多くの灰白色粘土ブロック（径2～150mm）、中層（径10～50mm）、少量の黄褐色粘質土ブロック（径2～100mm）を含む。しまり強い。
14. 黑褐色土、4層に似る。しまり強い。
15. 黄褐色粘質土、少量の中層（径10～30mm）を含む。しまり強い。
16. 黑色土、しまり良好。

TP-3

B L=13.25m



A L=13.20m



A'

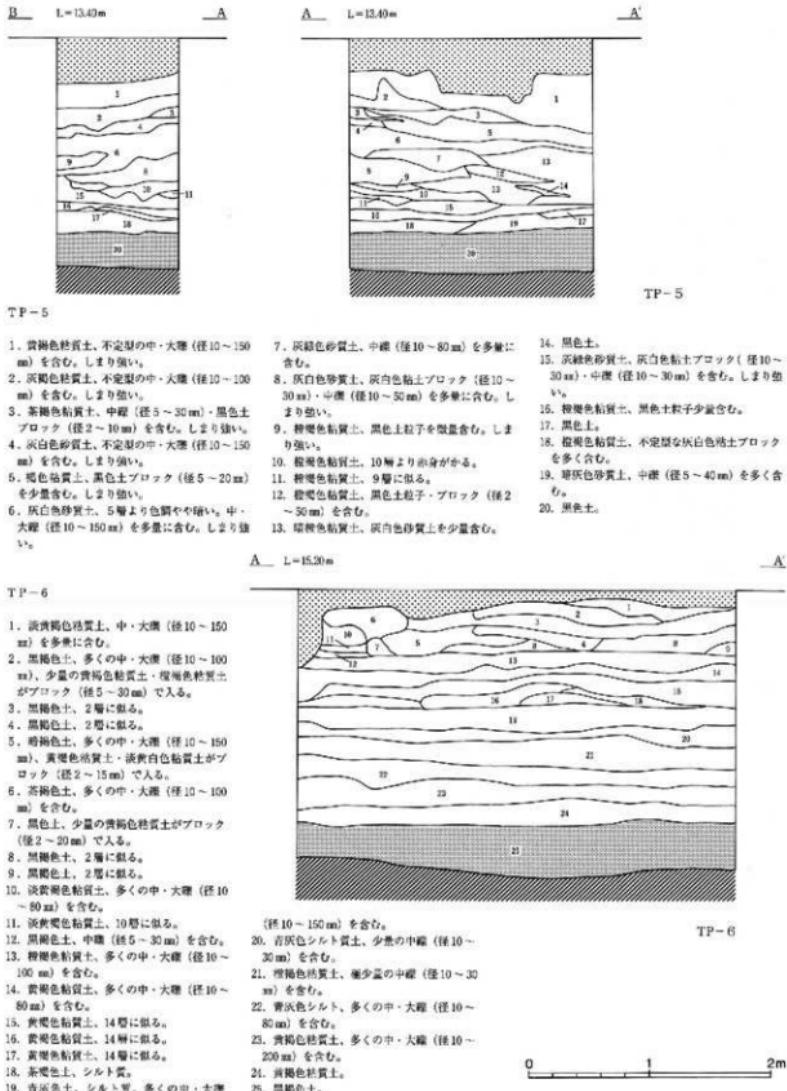
TP-4

T P - 4

1. 暗褐色粘質土、中層（径10～40mm）を少量含む。しまり強い。
2. 暗褐色土、中・大塊（径10～150mm）、深褐色粘土ブロック（径5～100mm）を含む。しまり強い。
3. 暗褐色粘質土、中・大塊（径10～200mm）を多量に含む。しまり強い。
4. 暗褐色土、黄褐色粘土ブロック（径10～30mm）、中・大塊（径10～150mm）を多量に含む。しまり強い。
5. 黑褐色土、中層（径10～30mm）を多く含む。
6. 褐褐色土、中層（径10～40mm）を多く含む。
7. 灰褐色粘質土、中層（径10～30mm）を多量に含む。
8. 灰白色砂質土、中・大塊（径10～150mm）、深褐色粘土ブロック（径5～100mm）を多量に含む。
9. 黄褐色粘質土ブロック。
10. 灰白色砂質土、中・大塊（径10～100mm）を多量に含む。
11. 灰白色砂質土、中層（径10～50mm）、黄褐色粘土ブロック（径10～50mm）を多量に含む。
12. 黑褐色粘質土、中・大塊（径10～100mm）を多量に含む。
13. 黑褐色粘質土、中層（径10～30mm）を少量含む。
14. 黑色土。

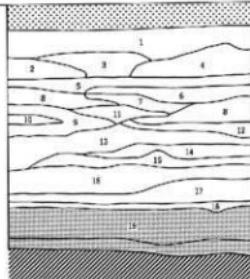
0 1 2m

試掘坑TP-3・TP-4断面図



試掘坑TP=5 : TP=6断面图

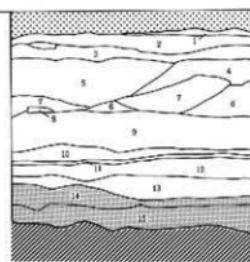
△ L=14.50m



TP-7

1. 黒褐色土、シルト質。中纏（径10～50mm）を含む。
2. 深褐色色粘質土、中・大纏（径10～150mm）を多量に含む。
3. 黒褐色粘土、シルト質。中・大纏（径10～80mm）を多量に含む。
4. 黒褐色粘質土、深褐色粘質土。灰白色粘質土がブロックで入る。中纏（径10～30mm）を少量に含む。
5. 黄褐色粘質土、深褐色粘質土。灰白色粘質土がブロックで入る。中纏（径10～30mm）を少量に含む。
6. 黄褐色粘質土、深褐色粘質土。灰白色粘質土がブロックで入る。中纏（径10～30mm）を少量に含む。
7. 棕褐色粘質土。
8. 黄褐色粘質土、深褐色粘質土。灰白色粘質土がブロックで入る。
9. 褐色粘土質土、シルト質。中纏（径10～50mm）を多く含む。
10. 黑褐色土、深褐色粘質土がブロックで入る。
11. 黑褐色土。中纏（径10～50mm）。棕褐色粘質土がブロックで入る。
12. 黑褐色土。11層に似る。
13. 棕褐色粘質土、シルト質。中・大纏（径10～100mm）を多量に含む。
14. 棕褐色粘質土、中・大纏（径10～80mm）を少量含む。
15. 棕褐色粘質土。14層に似る。
16. 稲穀、中・大纏（径10～200mm）、砂を多く混える。
17. 黑褐色土。中纏（径10～50mm）を含む。
18. 稲穀、中・大纏（径10～50mm）、砂を多く混える。16層に似る。
19. 黑褐色土。
20. 茶褐色土。

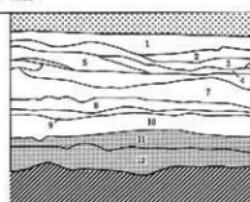
△ L=13.95m



TP-8

1. 黒褐色土、シルト質。中纏（径10～50mm）を多く含む。
2. 棕褐色土、シルト質。中・大纏（径10～120mm）を含む。
3. 黄褐色粘質土、中・大纏（径10～100mm）を多く含む。
4. 青灰色シルト、中・大纏（径10～80mm）を多く含む。
5. 黄褐色土、中・大纏（径10～120mm）を多く含む。
6. 茶褐色土、中・大纏（径10～100mm）を多く含む。
7. 深青褐色土、青灰色シルトが混じる。中・大纏（径10～100mm）を多く含む。
8. 黄褐色粘質土。
9. 青灰色シルト、中・大纏（径10～150mm）を多く含む。
10. 青灰色シルト、中・大纏（径10～150mm）を多く含む。
11. 布褐色土、中纏（径10～30mm）を多く含む。
12. 青灰色シルト、中・大纏（径10～150mm）を多く含む。
13. 青灰色シルト、中・大纏（径10～150mm）を多く含む。
14. 基褐色土。
15. 黑褐色土。

△ L=13.30m



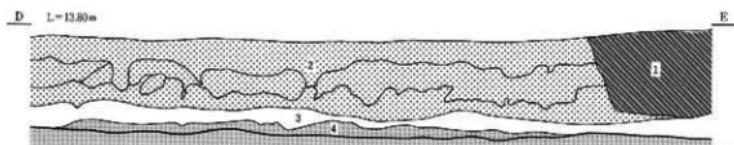
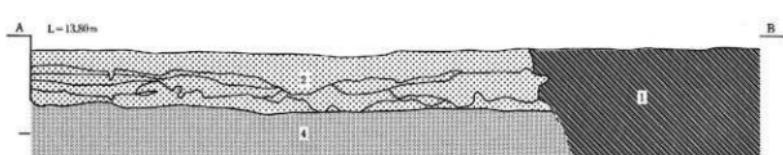
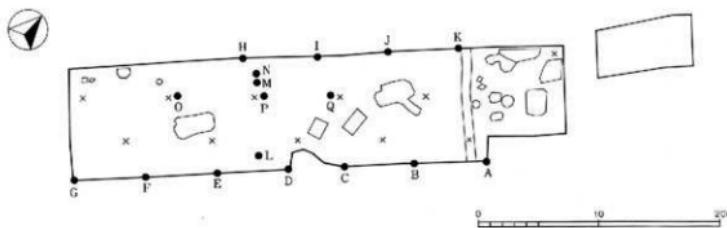
TP-9

1. 黄褐色粘質土、中纏（径10～50mm）を多く含む。棕褐色粘土、灰白色粘土がブロックで入る。
2. 黄褐色粘土。
3. 黑褐色土、シルト質。多くの中纏（径10～50mm）、少量の黄褐色粘土ブロックを含む。
4. 黑褐色土、シルト質。3層に似る。
5. 棕褐色粘土、中纏（径10～20mm）を含む。
6. 青灰色シルト、多くの中・大纏（径10～100mm）を含む。
7. 青灰色シルト、6層に似る。
8. 棕褐色土、シルト質。中纏（径10～50mm）を含む。
9. 青灰色シルト、中纏（径10～30mm）を含む。
10. 布褐色土、中・大纏（径10～100mm）を含む。
11. 茶褐色土、粘子微細。しまり良好。
12. 黑褐色土、粒子微細。しまり良好。



試掘坑TP-7・TP-8・TP-9断面図

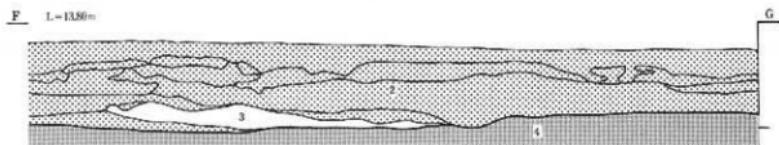
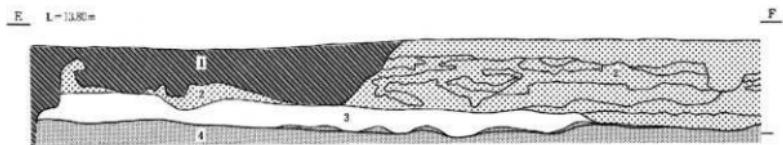
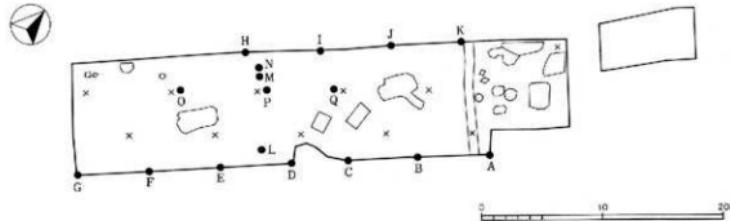
図面五 遺構実測図
二の丸茶屋地区



1. 滲孔。
2. 近・現代の疊油層。
3. 森上層、深褐色粘質土、中・大塊（径5～100mm）、灰白色粘質土・砂を含む。非常に硬い。
4. 黒褐色土質、粒子細かく緻まり良好。

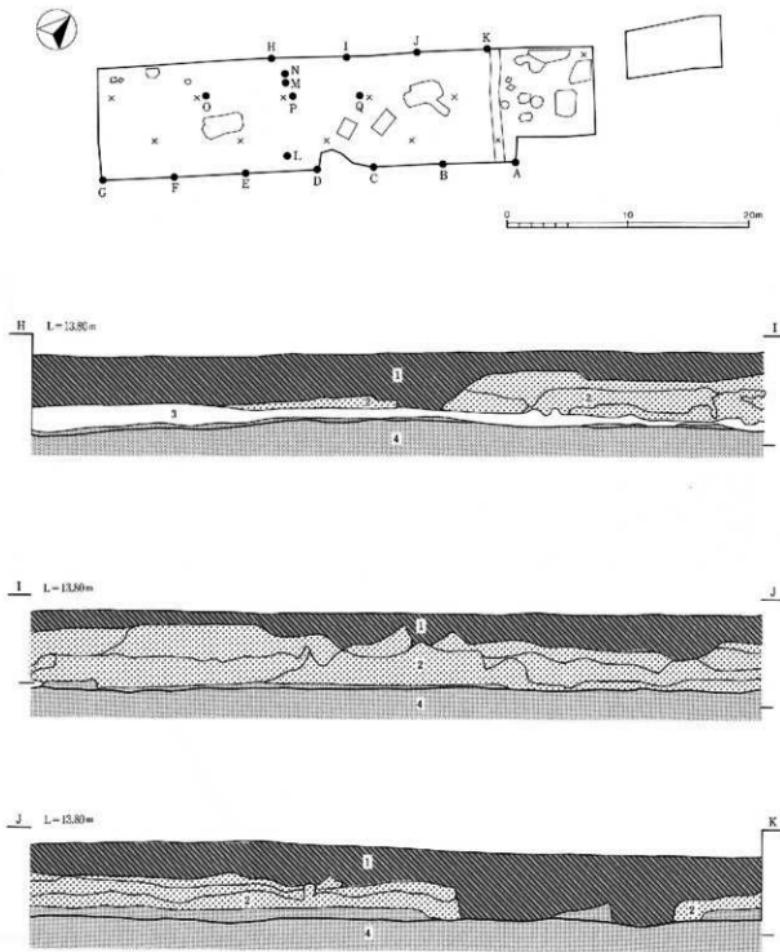
土層断面図、東壁〔1〕

図面六
遺構実測図
三の丸茶屋地区



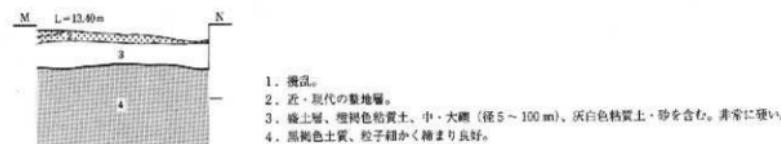
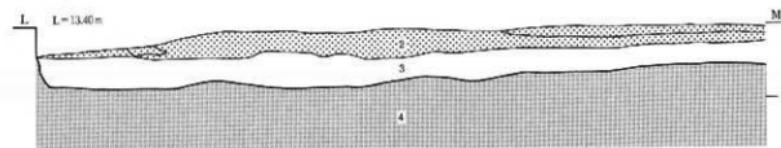
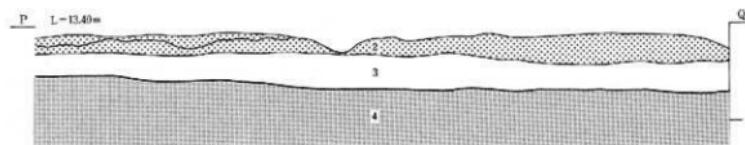
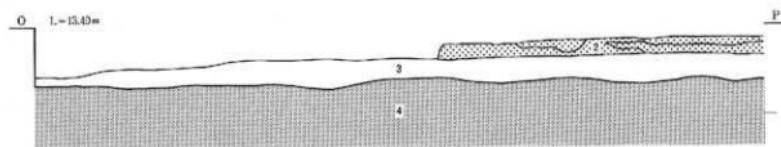
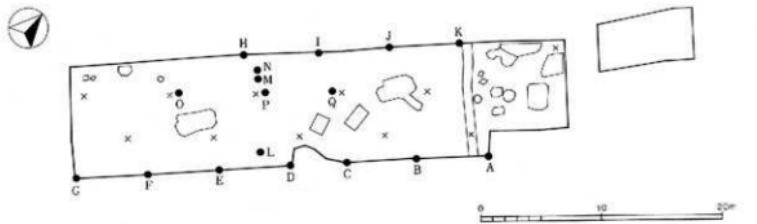
1. 現況。
2. 近・現代の些兆層。
3. 塗土層、棕褐色粘質土、中・大塊（径5～100mm）、灰白色粘質土、砂を含む。非常に硬い。
4. 黒褐色土質、粒子細かく締まり良好。

土層断面図、東壁 [2]

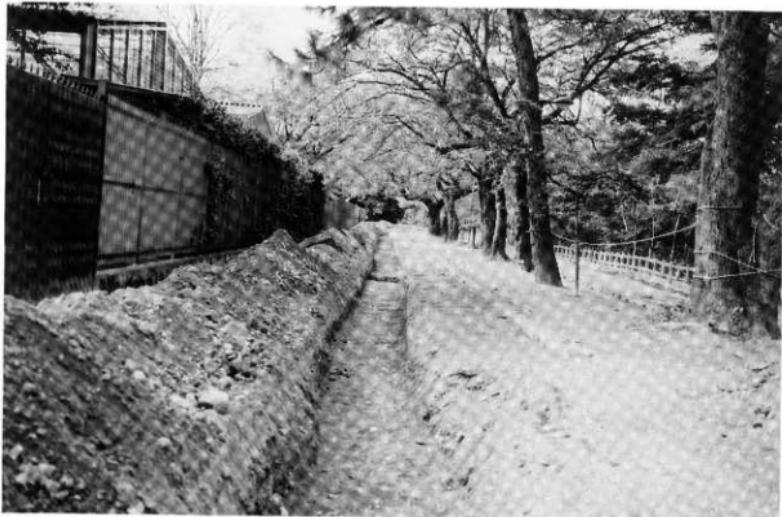


1. 濃亂。
2. 玄・現代の整地層。
3. 黏土層、棕褐色粘質土、中・大疊（径5~100m）、沃白色粘質土、砂を含む。非常に硬い。
4. 黒褐色土質、粒子細かく締まり良好。

土層断面図、西壁



土層断面図、中央壁



1. 明キ九東側整地面全長（北）



2. 明キ九東側遺物出土状況（東）



3. 拶手口北側整地面全長（東）



4. 銅治丸から大手口整地面全長（北）



5. 大手口から銅治丸整地面全長（南）



1. 試掘坑TP-1、土坑SK-1斷面（東）



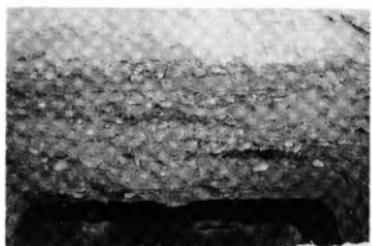
2. 試掘坑TP-5斷面（西）



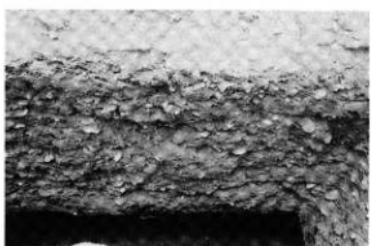
1. 試掘坑TP-2断面（北）



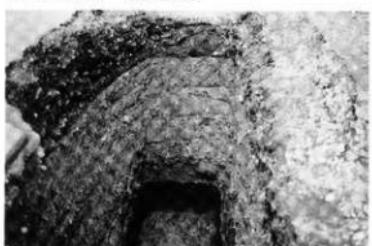
2. 試掘坑TP-2断面（東）



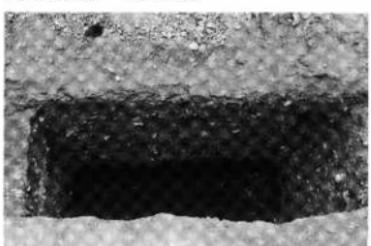
3. 試掘坑TP-3断面（東）



4. 試掘坑TP-4断面（東）



5. 試掘坑TP-6断面（東）



6. 試掘坑TP-8全景（西）



7. 試掘坑TP-8断面（西）

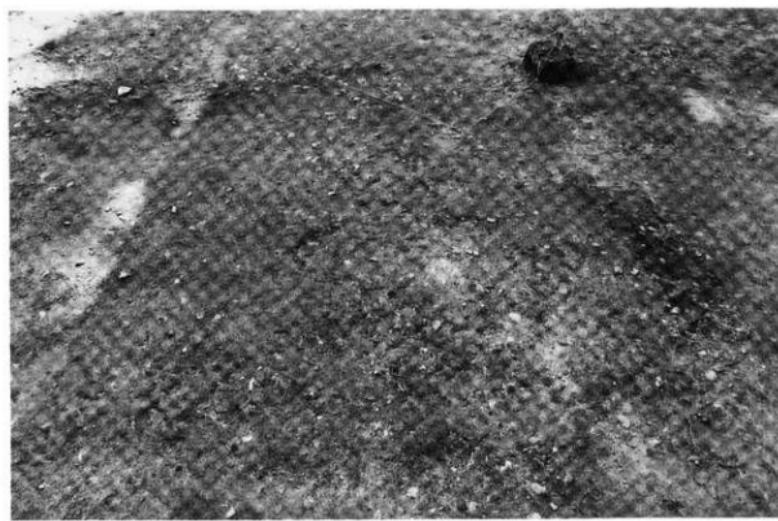


8. 試掘坑TP-9断面（東）

図版四 遺構 三の丸茶屋地区



1. 整地面全景（南）



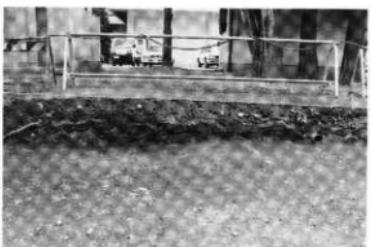
2. 整地面近景（北）



1. 調査前全景（南）



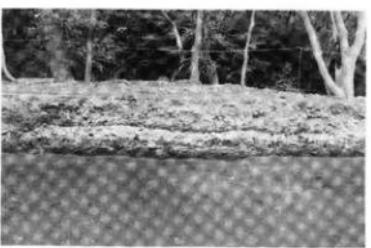
2. 東壁断面C～D（西）



3. 東壁断面D～E（西）



4. 西壁断面H～I（東）



5. 西壁断面I～J（東）



6. 中央嶺断面K～L（北）



7. 整地面除去全景（北）



8. 整地面除去全景（南）



1



2



3



4



5



6



7



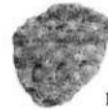
8



9



10



11



12



13

土師器—1 (明キ丸整地面)、縞文土器—2~13 (試掘坑TP-8)

高岡市埋蔵文化財調査概報第34冊

高岡城遺跡調査概報

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市庄小路7番50号

1997年3月31日

印刷所 半田印刷株式会社
富山県高岡市野村1485番地
